あいのその　2024 年 5 月号

「わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと
平和が、あなたがたにあるように」
（ガラテヤの信徒への手紙　1 章 3 節）

愛の園保育園　042-325-1045

キリスト教会は、ユダヤ教の聖典である「旧約聖書」とキリスト教独自の「新約聖書」のふたつをもって聖書としています。キリスト教はもともとユダヤ教の中のひとつのグループでしたから、新約聖書は旧約聖書を土台にして成立しており、両者は区別されても分離されることはありません。旧約聖書に記された神の救いの約束が、イエス・キリストによって実現したことを伝えるのが新約聖書なのです。

イエス・キリストの出来事を記した新約聖書には、全部で 27 の文書が収められています。そのうちの大半は、21 通の手紙です。これは教会が各地に建てられた頃に実際に起きてきた様々な問題、人間関係、家庭、人生における悩み、トラブルなどに対して必要に迫られて書かれたものです。神がイエス・キリストを通して私たちに何を与えてくださったか、私たちはそれに応えてどう生きていけばいいのかということを、いろいろな面から示してくれる文書です。今月の聖句の聖書箇所であるガラテヤの信徒への手紙もそのうちのひとつです。著者である使徒パウロは、他にも手紙を書きましたが、その多くが、この聖句と同じ言葉で書き始められています。これは、たとえば「拝啓」のような、単なる出だしの挨拶の言葉ではありません。事実、「拝啓」に該当する言葉はちゃんとありますが、パウロはそれを用いず、あえてこのように書き出しているのです。そもそもこの「イエス・キリストの恵みと平和があるように」という言葉は、送る相手に対する祈りの言葉です。本文に入る前に、何よりもまず受け手のことを思い、考え、そのために神に祈る言葉。これをもって手紙を書き始め、そしてその締めくくりにもまた、同じように祈りの言葉を持って閉じているのです。

パウロは教会の人々に対して、立場上、時に厳しい言葉や嘆き、憂いも口にしなければなりませんでした。しかしそこにあるのは相手に対する怒りや軽蔑ではなく、親子の情にも似た愛です。パウロにとって、自分が建て、指導した教会やそこに集う人々は、自分の子どものような存在だったからです。子どもを育てる親に子への愛情がなければそれは決して成り立たないように、パウロもまた深い愛と祈りをもって人々を支え、励ましていました。それは何より、パウロ自身が、たとえこのような私でも、神から愛されているのだ、ということを信じて生きていたからです。そんなふうに、神の恵みを受け、愛されて生きている者同士が、互いにも赦し合い、祈り合いながら生きること、そこにこそ人と人とが本当に平和に生きる道があるということを、私たちもこの祈りの言葉から教えられるのです。

（牧師　西脇　正之）